研究・調査プロジェクト報告

現代教化学部門

諸宗教と海外宗教研究PT報告

研究員

小林康洋

灘上智生 ·伊藤瑞康 池浦英晃 ・柴田章延・ 小瀬修達 原 松森孝雄 彰

はじめに

てなされた議論や意見により、さらに問題意識の深化と拡がりを持つこととなった。 容検討を行うプロセスでは、このPT自体も得るものが多かったが、それと同時に全国からの会議への参加者によっ るカリキュラム (プログラム) ことであった。そのうち、発足一年目となった二〇一七年は、第五十回中央教化研究会議 年間にわたって取り組んだテーマは、とくに新宗教 諸宗教と海外宗教研究PT(プロジェクトチーム)」が、二○一七年(平成二十九)、二○一八年(三十年)の二 の内容構成と資料作成、運営方法の検討に大きく関わることとなった。 (新興宗教)と位置づけられる法華系教団の現況と動向に関する 以下、 中央教研) 中 -央教 におけ 研 内

てのこのPTの成果を述べるものとし、そのあと、これまでの日蓮宗現代宗教研究所 現状への関心をいくつかの形にまとめてここに記していきたい。よって、この報告では、まず中央教研参画にあたっ この報告においては、そうした中央教研での豊かな議論の中から、二〇一八年に進めることとなった法華系教団 (以下、現宗研)による研究成 0

果にも目を向けつつ、法華系教団に関わる知見を述べ、報告としたい。

二、中央教研のプロジェクト

対論 を参照して頂きたいが、 詳細な報告はすでに『所報 |部のプログラムに関わるものである。 回 の教化学―」(九月十三~十四日開催。 を重ね、 第五十回目という節目を迎えた二〇一七年 PTがおもに内容構成の企画を担ったのは、 現代宗教研究』 いま一度、 第五十二号(二〇一八年三月発行)においてなされているので、そちら 於:宗務院) 我々が投げかけた「問題提起」を改めて振り返ってみる。 というテーマを掲げて開催されたものであった。その際の (平成二十九) 副題の の中央教研は、「ブッダと私たちを考える 「対論の教化学」を中心課題に据えた第

相反と分裂を生み、 さまざまな点でわれわれ日蓮宗と基本的な考えを異にします。教団史をひもとけば、そうした教義の解釈の違 とくに大石寺系新宗教の一部の団体は、近年、 前 略) 日蓮聖人を宗祖と仰ぐ他の宗派・教団 離合集散のエネルギーともなってきたことは明らかです。 ・団体にあっては、 組織的に過激な活動として、 聖人の教えのとらえ方と本尊の位 日蓮宗寺院に対して突然来訪 置づ けなど、

、法論、と称して教学・ 信仰上の疑問を論ずるといった行動が報告されています(大石寺はこのような団体を破門

とし認めていません)。

ŋ 報してきたところです。 きました。現代宗教研究所でも、 宗門ではそのような団体への対処方法を各寺院へ通知し、不当かつ不法な行為に対しては一貫した姿勢を示して 危機感が共有できていないという問題があります。そこで、今回の研究会議では第二部を、こうした大石寺系 (中略) :(※補注 そうした団体の奉ずる教義的特徴や勧誘方法などについて、 部の団体の活動に対し)宗門では地域によって未だ認識に差があ 教化資料にまとめ広

286

教学を基礎とする団体の基本的な考え方を知る機会とし、日蓮宗の教学との相違点を確認していきたいと考えます。 彼らが ″法論′ と称する活動の一端を具体的に知り、 参加者のみなさまには現場での教化活動に役立てて頂

このように、中央教研参加者には一部の過激な活動を行う法華系教団への「危機感の共有」と訴えた上で、各分散

会の会議の場での活発で積極的な意見を求めた。

きたいと思います。」

象に残ったものではなかったかと思われる。 って、この内容はにわかには咀嚼できないものであったかもしれないが、 を行い、より理解を深めてもらうよう図った。普段、あまり他の法華系教団の教えに触れることの少ない参加者にと フらによって語り、 系新宗教が依拠するいくつかの教学内容ごとでプロジェクターに映し出す形式で作成し、それを現宗研の運営スタッ その議論を促すものとなるよう、PTが中心となって、寺院への訪問があった際の〝想定対論〟を、とくに大石寺 演じるという手法をとった。また、その後、大石寺系教学に特徴的な教学内容のキーワード解説 視覚にも訴える方法を通して、 参加者の印

切」、「日蓮宗以外にどのような法華系教団があるのかがわかるようなまとまった資料がないか」といった声が拾われ 教の動向に関心を払っておくべき」、「ただ対論・対応するということではなく、 識、心構えにおいてさまざまな準備が必要」、「仏陀観や本尊観を見つめ直す良い機会となった」、「つねに法華系新宗 また、終了後にまとめられた分散会それぞれの報告では、「宗門のこれまでの歴史、 自分の布教の言葉で語ることが大 取り組みを見直す時期」、 知

他の法華系教団の現況に関心を寄せ、その教学・教義を知ることは、私たち自身の教義・教学、さらには信仰をも問 であり、 「諸宗教と海外宗教研究PT」では、この中央教研を、 さらに教化の現場で研鑚を重ねていく決意を新たにする場としたいと願って、 我々教師が 「自分たちの立ち位置を確認するための機会」 内容企画を練り上げてきた。

ている

うことにつながるとも言えよう。

三、現宗研の取り組み

教団 教師による法華系教団に関わる論考について振り返り、 うした宗門のあゆみのなかでも、 てきた軌跡であり、 昭 の動向に関する研究および調査がある。 和三十年代に澎湃として起きた創価学会の 現宗研の設立そのものにも関わっており、 これまであまり顧みられることのなかったものに、 ここからは、 、折伏大行進、への宗門の対応は、 先師の仕事として確認しておきたい。 その一部に過ぎない 今後、 宗門史としても検討されるべきものだろう。 が現宗研 護法運動などの形で先師が格闘 現宗研が取り組んできた法華系 の取り組 み ならびに日蓮宗 そ L

時)、 受けることとなった。宗教団体の戦後のはじまりはここにあると見てよい。 代会長に就任し、 の成立だが、そこから分派した霊友会系教団は宗教法人法公布の昭和二十六年の当時、 九五 仏所護念会教団、 二年 昭 折伏大行進を開始。 和二十六)、 霊法会、 宗教法人法が公布され、 法師会教団などいくつも存在していた。 その前月には 『聖教新聞 それまで活動してい 一も創刊されてい た宗教法人は新宗教法人として認証を 同年五月には戸田城聖が創価学会第二 る。 霊友会は すでに立正交成会 九 二四 (大正·

『宗教公論』に「新興の題目教団諸派」という論稿を寄せている。 教団」を研究の対象とし、 学者で満洲国 宗門関係者による最初期の法華系教団考察としては、 一の宗教調査などにも関わっていた方である。 活字となった最初期のものになるだろう。 一九五二年 おそらくこれが日蓮宗側 浜田は一八九一年 (昭和二十七) に、 から (明治二十四) 立正大学教授 「新興団体としての 生まれ 浜 \mathbb{H} 法華系 の宗 一本悠が 教

また、 昭和三十年代頃の 『日蓮宗新聞』 紙上では、 創価学会の活動に対し寺院 檀信徒への警戒を促すと同時に

その教義への批判を展開した記事が数多く掲載されていた。

現宗研所長を務めた中濃教篤は、

浜田本悠の論稿が掲載された同じ『宗教公論』に、一九五四年

げられたのは霊友会、立正交成会(当時の名称)、世界救世教、天照皇大神宮教、PL教団の五つで、 会と立正交成会への分析を試みている。宗門の側からの法華系教団への関心は、まず新興宗教へのそれとして始ま 行っていた新興教団に対し、 ったといえるとともに、その後の旺盛な著作による中濃教篤の研究に負うところが多かった。 「新興宗教についての断想」を寄せた。また、 教義解説と批判的検討を加えた章を担当、編者として参加している。この本で取り上 同年に出版された『新興宗教の解剖』において、 当時活発な活動を (昭和二十九)、 中濃は霊友

として掲げられている。 同朋運動や日蓮宗門の現勢を総体的にとらえる宗勢調査がテーマとされ、 草創期の現宗研に期待されていた研究活動の一つとしては、調査研究活動があった。それは、真宗大谷派における 中濃教篤らの主導による教義面からの研究がある一方で、 初期の 『所報』にはその詳細な報告が成果 実態調査という視点からも法華系

教団に関心が向けられていた。

めの準備段階といった内容である。 の発生と展開について 九六九年 主題設定と新興宗教の性格について明確にしておこうというに意図が強く、 (昭和四十四)、 (調査部報告)」は、その調査観点からの問題意識を示す論考である。 ただ、この報告は調査 『所報』 第三号に掲載された、「新興宗教に関する調査研究の問題点-本格的に調査に取り組むた 一日蓮系新興宗教

その後の現宗研の活動を見ていくと、この時代には実際に法華系教団調査は行われなかったことがうかがえた。

四 現宗研における八十年代の新宗教調査プロジェクト

しかし、その後も、 現宗研のなかで新宗教研究は重要な位置を占めた。とくに昭和の終わり頃から平成のはじめに

かも、 かけては(具体的には一九八七~一九九三年頃)、現宗研において最も盛んに新宗教研究が行われた時代である。 いう具体的な調査目的の問い直しと転換を図ったプロジェクトであった。 それまでの新宗教研究が 「教義的検討に偏重していた」との認識と反省から、 「教義から教化(方法)

現宗研における新宗教研究の方向性が示され、その後、 九八八年(昭和六十三)に 『新・新宗教ハンドブック』に結実していった。 『現代宗教研究』第二十二号に、「新宗教調査報告Ⅰ 連の新宗教調査プロジェクトは、 調査研究の方針と課題」として、 一九九三年 (平成五)

対象として『現代宗教研究』 り調査が実際の作業となった。『新・新宗教ハンドブック』には掲載されなかったが、法華系教団としては妙道会が 化の為の の伝統教団へ 関係者から聞き取るとともに、 これらの課題は調査を進めるに当たって留意されていたことと思うが、 この新宗教調査が行われるにあたっての目的と指針は、 新宗教理解、 の影響、 ⑤新宗教理解に立った日蓮宗教化の試案作成、 ②新宗教全体の、 のみで分析が加えられた。 法座の様子などを伝えるものとなっている。 教化を中心とした把握、 沿革 「これからの新宗教調査 教義・ ③法華系新宗教の総体的把握、 本尊 の五点を挙げてまとめられてい 研究員が各新宗教教団を訪問しての : 組 織 教化・ 研究の課題」として、 教育法などの項目を妙道会 ④日蓮宗教化の活 (1) 別き取 宗

五、新宗教研究のなかの法華系教団

ここからはその点に焦点を当てて少し紹介してみることとしたい。 ナリズムを中心に行われてきたと見てよいが、 学問界全体に目を向けたとき、 新宗教を対象とした研究は、 その営為のなかで法華系教団はどのように扱われてきただろうか。 歴史学者、宗教学者、宗教社会学者そしてジャ

創価学会を取り上げて、「近代の法華系新宗教」を素描したその代表格であり、 近代宗教史家の村上重良による『新宗教の思想と行動』(一九八〇年刊行)は、本門仏立宗、霊友会、 その淵源として取り上げられるのは、 本門仏立講、 霊友会、 創価学会という三つの団体が多かった。 その後の研究に影響を与えるととも 立正佼成会

同書はロングセラーとなって、新宗教研究の入門書的位置づけを得た(8)

では、 ているので、取り上げられた教団も異なっているが、それがかえって新宗教の新陳代謝の激しさを表している。ここ ヨック以降を収めた また、清水雅人らはルポルタージュの手法をもって、 霊友会、 幕末から一九七〇年代までを領域とした『新宗教の世界』全五巻と、 立正佼成会、 『新宗教時代』全五巻のふたつを刊行した。それぞれのシリーズの刊行は二十年の時を隔てられ 創価学会、妙智會が対象であった。 当時の代表的な新宗教教団のあゆみと布教実態をシリーズと 高度成長期の終焉であるオイルシ

現代宗教研究

例研究の対象とした宗教社会学者に、西山茂、 のとは見なさず、善きにつけ悪しきにつけ新宗教教団の特徴に言及した。これらの研究者のなかで、 型の概念化をめざす。一九七○~九○年代に旺盛な研究を生み出した社会学者たちは、宗教の持つ呪術性を遅れたも 宗教学がその教団の教義内容や宗教性の発展段階、 宗教社会学はまずその教団の実態調査や信者の入信過程調査 島薗進、 教祖・創立者のパーソナリティを重視した思想研究傾向を持つ 渡辺雅子らがいる。 ・分析を通して、 個別の新宗教に見られる類 法華系教団を事

に関する研究営為のほとんどが収録されている。 の法華運動』 とくに西山茂はその教え子門下も含めて法華系教団に特別の関心を向けてきた。西山はその集大成を『近現代日本 (二〇一六年) として刊行し、ここには、 一九七〇年代から近年まで西山が取り組んできた法華系教団

かし、

このPTは、

六、九十年代の法華系教団に対する現宗研の取り組み

研編集による『教化資料シリーズ』でも取り上げるとともに、講演会を開催するなどしてきた。 民党との連立政権といった事象に関して、創価学会をテーマとした研究員・嘱託による論考を『所報』に発表、 現宗研は八○年代から九○年代にかけても創価学会の動向に目を向け続け、 日蓮正宗からの離脱や会則の変更、 自

教義内容が注視されて、 創価学会と同様に、 日蓮正宗を離脱した冨士大石寺顕正会については、 やはり 『教化資料シリーズ』などで取り上げられてい 九〇年代以降とくにその動向と教団の特徴 る[i

式ながら、 らは現場での教化活動に役立ててもらいたい、との願いのもとに編まれ、 ずれも現宗研に置かれたプロジェクトとしてその活動の実態把握を精力的に努め、 コンパクトな教化資料として重宝された。すでに発行からかなりの年月を経てはいるが、 宗門全寺院へ配布された。 執筆されたものである。 再度、 小冊子という形 手に取っ これ

七、PTの今後の課題――まとめにかえて-

て頂くことを希望したい。

までの現宗研の新宗教調査をはじめとした法華系教団研究の取り組みについても研究業績史的にまとめてみた。 いだ関心から、 約 とくに法華系教団に特化して述べてきた。また、すべてについて触れることはできなかったが、 一年間、 PTとして取り組んだ研究の一端を報告し、また、二○一七年の中央教研テーマ から 今日

意見もあった。 では、よりグロ 殊に海外の宗教については着手も言及もすることが叶わなかった。PTとして積み残した課題はまだ ーバルな視点で、 イスラム教といった宗教の動きや問題を見てゆくことが必要ではないか、とい った

「諸宗教と海外宗教研究」という大きな枠組みでテーマを設定したこともあり、

メンバ

] 間

まだ多いと言わざるを得ない。

そこで、「諸宗教と海外宗教研究PT」としての当面の課題と方向性を最後に記し、 PT報告のまとめに代えさせ

て頂きたい。

指摘を受け、 「日蓮宗以外にどのような法華系教団があるのかがわかるようなまとまった資料がないか」といった中央教研での 現在、宗教法人として認証されている法華系教団を網羅したデータを現宗研として作成する。

新宗教研究自身も岐路に立っている。現宗研として、新宗教を対象とした研究のフィールドを持つべきかどうかに 戦前・戦後に生まれてきた新宗教も既成教団化し、「新宗教」という概念・とらえ方が揺らいでいる。その意味で

ついて、より深く考えていく。

さまざまな国内宗教、 海外宗教に起因する、これから起こりうる「宗教社会問題」についての考察があるべき。

注

- 1 浜田本悠 (一九五二) 「新興の題目教団諸派」 『宗教公論』 二十二号 宗教問題研究所
- $\widehat{2}$ 中濃教篤 (一九五四) 「新興宗教についての断想」 『宗教公論』 二十四号 宗教問題研究所
- (3) 中濃教篤他 (一九五四) 『新興宗教の解剖』 東成出版社
- (4)中濃教篤(一九七○)『庭野日敬 立正佼成会』新人物往来社
- (5)丸山照雄(一九六九) 「新興宗教に関する調査研究の問題点― 日蓮系新興宗教の発生と展開について」(調査部報告)『所

6 赤堀正明(一九八八)「新宗教調査報告Ⅰ 調査研究の方針と課題」 『現代宗教研究』

その他この時期に掲載された代表的なものとして

片野博義(一九八七)「現代社会の問題と日蓮宗教化-新新宗教問題-」(要旨)『現代宗教研究』 第二十一 号

八島英雄(一九八八)「天理教の教義と教会の現状」『現代宗教研究』 第二十二号

小林永司(一九八八)「教化の問題点―妙智会の場合―」『現代宗教研究』

第二十二号

·新宗教調査報告I」(一九八八) 『現代宗教研究』 第二十二号

·新宗教調查報告Ⅲ」(一九九二) 新宗教調査報告Ⅱ」(一九九四) 『現代宗教研究』 『現代宗教研究』 第二十三号

赤堀正明(一九九三)「新宗教への関心は常にもっていなければならない」『現代宗教研究』第二十七号

中野毅 松澤正博(一九九三)「新々宗教はどのようにして若者を集めたか」『現代宗教研究』第二十七号 (一九九四)「折伏・座談会・友人葬-在家主義法華系新宗教における自己教化運動-」『現代宗教研究』

7 片野博義 (一九八八)「新宗教調査報告Ⅰ 妙道会」『現代宗教研究』 第二十二号

8 村上重良(一九八〇)『新宗教の思想と行動』 評論社のちに『新宗教―その行動と思想』とタイトルを改めて岩波現代文

9 清水雅人編(一九七八~一九七九)『新宗教の世界』シリーズ全五巻 (一九九四~一九九七)『新宗教時代』シリーズ全五巻

10 渡辺雅子は『現代日本新宗教論』(二〇〇七年、御茶の水書房)に、立正佼成会(法座体験における「他者の役割」)、

、分派した教団が、 (教団発行の会報の分析を通して銃後を守った女性たちどのような影響を受け、自己形成を行ったか)、 創設者の死をどのようにとらえ教祖化していったかの過程を分析)を対象とした論文を収録。 妙智會教団 入信渦

理的な実践性を具えていたとして『日本仏教の社会倫理−「正法」理念から考える』(岩波書店、二○一三年)をあらわ 関係を持つに至り、また大衆に広く受け容れられていった過程をまとめた。(「権威の危機と法華系新宗教」)。この段階 程分析の先駆者。一九七〇年代以降の新宗教隆盛の動向から「新霊性運動」の概念を規定した島薗進は、『現代宗教救済 では歴史的な叙述にとどまっていたが、のちに、とくに日本の大乗仏教に拡大して、仏教それ自身のうちに社会的・倫 (青弓社、一九九二年)のなかで、法華系新宗教が日蓮宗派の伝統を部分的に継承しつつ、ナショナリズムと親和的

11 西山茂(二〇一六)『近現代日本の法華運動』 春秋社

- 12 小冊子や別冊として宗内へ発行されたものの一部を紹介すると、『現宗研教化資料シリーズ』で刊行された『№11創価学 会の徹底的解剖-お題目総弘通運動のために-』(一九八七年)、『№16 創価学会の内部矛盾』(一九九〇年)、 公開講座
- 13 『現宗研教化資料シリーズ』として『№26 顕正会について』(一九九八年)、『№35 顕正会についてⅡ』(二○○五年)、 の内容がまとめられた『創価学会と公明党』(二〇〇九年)などがある。
- いずれも顕正会の教義や活動内容への考察を行っている。また、顕正会の主張を分析したものとして、小瀬修達、(二〇 『所報』 別冊として現宗研による編集で『顕正会〈Ⅰ〉』(一九九九年)、『顕正会〈Ⅱ〉』(二○○一年)がまとめられた。 一顕正会諌晓書 『日蓮大聖人に背く日本は必ず亡ぶ』の検証」『現代宗教研究』第四十六号などがある。
- (14)この法華系教団リスト、データ作成の作業は、現在、PTで継続して行っている。